連載　過去の災害を振り返る　第21回

三陸を襲った２つの大津波

防災情報機構ＮＰＯ法人　会長　伊藤　和明

明治三陸地震津波（節句の夜の大津波）

東北地方の太平洋沿岸は、昔からたびたび重大な津波災害に見舞われてきました。近年も、2011年３月11日、M9.0の巨大地震によって大津波が三陸沿岸などを襲い、２万人を超える犠牲者を出したことは、記憶に新しいところです。

過去を振り返ってみると、たとえば江戸時代だけでも、1611年（慶長16年）、1677年（延宝５年）、1793年（寛政５年）、1856年（安政３年）など、Ｍ８クラスの大地震による津波で、多数の家屋が流失し、多くの犠牲者が出ています。

やがて明治の時代になり、とりわけ歴史に残る大規模な災害をもたらしたのは、以下に述べる「明治三陸地震津波」によるものでした。

1896年（明治29年）６月15日の午後７時半を過ぎたころ、三陸沿岸の人びとは、ゆらゆらとした弱い地震の揺れを感じました。現在の気象庁の震度階では、せいぜい震度２か３程度だったと思われます。地震による被害もなく、おおかたの人は気に止めることもありませんでした。

あたかもこの日は旧暦の５月５日、端午の節句にあたっていて、沿岸の村々では祝いの酒を酌みかわしたりしていました。

端午の節句といえば、男の子の節句です。折しもこのとき、前年に日清戦争で勝利をおさめた兵士たちが三陸の各地に帰っていて、凱旋兵士を囲んでの祝賀会などが開かれていました。花火大会を催している町もありました。

そこへ地震から30分あまり経ったころ、ものすごい海鳴りがしたかと思うと、山のような大津波が押し寄せてきたのです。人も家も船も、たちまち渦巻く波に呑みこまれ、沿岸の村々は瞬時に壊滅してしまいました。津波は２度、３度と襲いかかり、沿岸地域をなめつくしていきました。

『三陸大海嘯岩手県沿岸被害調査票』によれば、大津波によって、岩手県田老村（現・宮古市田老地区）では、人口の約83％にあたる1,867人、唐丹村（現・釜石市唐丹町）では、約66％の2,535人、釜石町（現・釜石市）では、約54％の3,765人が犠牲になりました。三陸沿岸全体での死者は、約２万2,000人といわれています。

この時の惨状を伝える悲話が、沿岸の各地には残されています。

岩手県の大槌町では、９人の凱旋兵士を歓迎して、昼間から花火大会を催していました。夜８時頃、４発目の花火を打ち上げ終わったとき、沖の方から雷のような音が聞こえたかと思うと、大津波が襲いかかってきました。兵士も含め、花火を見物していた数百人が犠牲になったといわれています。

宮城県歌津村（現・南三陸町歌津）の或る家では、結婚披露宴が開かれていました。お祝いに参加した人びとに囲まれて、新郎新婦が三三九度の盃を上げているさなかに大津波が襲ってきたのです。

押し寄せてきた津波に、花嫁をはじめ来客もすべて流されてしまい、花婿ひとりだけが奇跡的に助かったのですが、すべてを失った衝撃から、彼は心の病にかかり、人びとの涙をさそったといわれています。

岩手県重茂村（現・宮古市）の漁師４人は、沖へマグロ漁に出ていて、午後８時ごろ、陸の方角で雷の落ちるような音がしたのを聞きました。しかし、津波が村を襲ったことなど知りません。漁を終え、港へ帰るために暗闇の中を岸へ向かって船を漕いでいると、家々の残骸が流れてくるばかりか、海面のあちこちで人声がするではありませんか。

「さては、昔から聞いている船幽霊にちがいない。うっかり手を出したり声をかけたりすると、海中に引きずりこまれるかもしれない」と思って、４人とも声をひそめていたそうです。

一方、津波に流され、海上を漂っている人びとは、大声を上げて船に救いを求めているのですが、反応がありません。そのうちに、漂流している人びとの中から、「おれは助役の山崎だぞー」という声が聞こえたため、船上の漁師たちもようやく異変に気づき、救助活動を始めたということです。

当時の雑誌に描かれた津波災害

三陸沿岸各地を津波が襲った時の状況は、当時の雑誌だった『風俗画報』や新聞の『巌手広報』などに詳しく載せられています。

『風俗画報』に載る宮古測候所長の談話を要約すると、次のようになります。

「地震は微弱だったが、計13回ほどあった。その後、午後７時20分ごろに、潮が異常な速さで引きはじめ、同時に遠くで雷の鳴るような音が聞こえた。

８時７分に約4.5メートルの津波が襲来し、人も家畜も家屋も流されてしまった。津波は、その後６回にわたって繰り返し、海面の振動は翌日の正午まで続いた」

また、同じ『風俗画報』には、「６月15日の夕刻、数回の地震があった。午後８時ごろ、東閉伊郡の沖合いで、巨大な大砲を打ったような轟音があり、その音が止んで数分と経たないうちに、津波が押し寄せてきた。天にも届くような大波が押し寄せてきて、市街も村落もすべて水に浸かってしまった。沿岸一帯70数里が、一瞬にして砂に埋まり、死体や廃屋が累々と重なる惨憺たる状況となった」と記されています。

また、津波が襲来した夜には、多くの村人が漁のため沖に出ていて、沖合いでの津波体験も幾つか報告されています。

たとえば、『巌手広報』には、「当夜は、40人ほどの漁師が、５、６隻の船で赤魚や目抜の漁に出ていた。沖合いで網を張っていたところ、北から南へ向かって黒線が突き抜けたと思いきや、網がグラグラと揺れ、折角とらえた魚が逃げてしまった。何ごとかと顔を見合わせて不安に思ったが、別に危険はなかったので、翌朝岸に戻ったところ、あまりの惨状に驚き、呆然となった」と記されています。

津波、家屋を破壊し、人畜を流亡するの図

結婚披露宴の最中に津波に襲われた（宮城県歌津村）

恐怖の一夜が明けたとき、生き残った人びとの目の前に広がっていたのは、すっかり変り果てた村々の姿でした。浜は、見渡すかぎり家々の残骸で埋まり、多数の遺体が散乱していたのです。集落のあった場所には、家々の土台石だけが残されていて、家屋は跡形もなく消え去っていました。

前夜から沖へ漁に出ていた船も、漂流物のあいだを縫うようにして村へ戻ってきました。ところが、住んでいた家はなくなっていて、ただただ途方にくれるばかりでした。

海に浮かんでいた遺体の数があまりにも多かったため、地引き網を使い、何回にも分けて引き上げたといわれています。

“津波地震”の脅威

明治三陸地震津波をもたらした地震の震源は、三陸の沖合い約200キロの海底で、地震の規模は、津波を考慮に入れた場合、M8.2前後と推定されています。

しかし、先に述べた宮古測候所長の談話に、「地震は微弱だったが……」とあるように、津波をもたらした地震の揺れが弱かったために、沿岸の住民で、津波の襲来を予想した人は殆どいませんでした。揺れに気づかなかった人さえいたほどです。

三陸沿岸は、昔からたびたび津波災害に見舞われていますから、沿岸の村々にも「地震を感じたら、まずは津波に注意！」という言い伝えはあったはずです。ですから、地震の揺れがもっと強かったなら、人びとは速やかに避難行動を起こしていたに違いありません。

このように、地震の揺れが強くなくても、津波だけを発生させるタイプの地震は、“津波地震”と呼ばれています。

では、この津波地震というのは、どのようなしくみで起きるのでしょうか。

一般に海溝型の大地震は、海底下で発生した地震によって、海底が隆起したり沈降したりすると、その変動が海水にそのまま伝わって海面が上下し、津波の発生源になります。

このとき、地震を起こす海底下の破壊が急速に起きれば、陸上では強い地震の揺れを感じます。しかし時には、海底下での断層破壊がゆっくりと時間をかけて進行することがあります。この場合、陸上ではそれほど強い揺れを感じることはありません。

しかし、このような地震が発生しても、破壊された断層の面積は、急速に破壊が起きた時

と変わらないので、海底の地形は同じように変動し、津波も同じように発生するのです。これが津波地震の発生する仕組みで、断層がヌルヌルとゆっくり動くので、“ヌルヌル地震”とも呼ばれています。

地上での震度がせいぜい２か３程度だったという明治三陸地震は、まさに津波地震の典型だったといえましょう。

「地震の揺れが弱くても、大津波の来ることがある」というのは、防災上たいへん重要な視点なのです。過去100年ほどの間に、日本の沿岸を襲った津波のうち約10％は、このような津波地震だったともいわれています。

したがって、沿岸住民も、地震の揺れが弱くても、ユラユラとした奇妙な揺れを感じたなら、津波の来ることを予想して、避難行動に結びつける意識を持っていてほしいと思う次第です。

昭和三陸地震津波

明治の大津波から37年を経た1933年（昭和８年）３月３日の午前２時半すぎ、三陸地方を強い地震が襲いました。宮城県を中心に震度５の揺れでしたが、地震そのものによる被害は比較的少なく、一部で崖が崩れたり、建物の壁に亀裂が入ったり、石垣が崩れるなどの程度でした。

この地震は、日本列島の下に沈みこんでいる太平洋プレートの内部が割れて発生したもので、地震の規模はM8.1とされています。

三陸の沿岸では、地震のあと、海水が急に引き始めました。このとき、海底の砂や礫が、水の流れとともにザワザワと音を立てていたのを、多くの人が聞いています。そして、地震発生から30分ほど経ったころ、山のような大津波が襲ってきたのです。

津波は忽ち沿岸の集落を呑みこみ、家々を洗い去ってしまいました。岩手県の沿岸では、多くの場所で津波の高さが10メートルを超え、ところによっては、20メートル以上に達した地区もありました。

北海道の南岸から三陸沿岸にかけて、家屋の流失4,034戸、倒壊1,817戸、死者・行方不明者は3,064人に達しました。中でも岩手県沿岸の被害が大きく、田老村田老では、362戸のうち358戸が流失、住民1,798人のうち、42％にあたる763人が亡くなりました。

「東京朝日新聞」の記者が、田老村を取材した時の記事によると、「田老村は、そっくり波にもっていかれて、原始の砂浜と化していた。人家はもちろん、土台石一つ見当たらない……（中略）……役場の手前一町ほどの所に,死体が100以上も折り重なって集められている。妻を求め、子を求めて放心しているように歩いている人もいる……わけても哀れなのは、母親が幼児をひしと抱きしめて死んでいるのや、あるいは子どもをすっぽりと波に抜きとられても、抱きしめたままの格好で死んでいる母親の姿だ」と書かれています。瞬時に村を洗い去った津波による惨状が、目に浮かんでくるようです。

津波火災の発生

田老村では火災も起きました。40戸ほどが燃えながら津波に流されていったという証言も

あります。「家が流されていく途中で、ランプが倒れて火事になった」という噂もありました。津波に流された40人あまりが、溺死ではなく焼死したとも伝えられています。焼けながら流れてきた家屋に触れて焼死したのです。

釜石町では、大規模な火災が発生しました。津波が繰り返し襲ってくるなかで、町内の２か所から出火して燃えひろがり。300戸ほどが焼失したといわれます。

出火原因は不明のままです。地震直後に停電したものの、まもなく復旧してからの出火だったため、漏電が原因だったのではないかとも疑われています。

災害を伝承することの難しさ

昭和の三陸大津波は、明治の大津波から37年後のことでしたから、まだ多くの大人たちが、恐ろしかった当時の体験を記憶していたり、両親や近隣の古老などから、津波による惨状を聞かされていたために、強い地震が発生したとき、津波の襲来を予想して、すぐ行動を起こしました。

真夜中の２時半過ぎという厳しい寒さのなかで、この人たちは海岸に出て、海の様子を監視しはじめました。そして、海水が沖へと引いていくのを見たとき、大声を上げたり、半鐘を打ち鳴らしたりして、住民に避難を促したのです。そのおかげで、どれだけの人の命が救われたかわかりません。

その一方で、地震を体験しながら、避難しようとしない人びともいました。何故だったのでしょうか。

大津波をもたらした昭和の地震では、明治の“津波地震”とは違って、各地で震度４から５の強い揺れを感じました。ところが、地震の揺れが陸上では弱かったのに、大津波が襲来したという明治の時の体験から、一部の住民のあいだでは、「地震が弱いと津波は大きい。地震が強いと津波は小さい」などという誤った言い伝えが生まれていたのです。

「今度は強い地震だったから、津波は大丈夫」と勝手に思いこんで、避難しなかったために、命を落とした人もあったといわれています。

災害を正しく伝承することの難しさを物語る一例だったといえましょう。

また、明治の大津波は旧暦５月５日の端午の節句、昭和の大津波は３月３日の桃の節句に発生したことから、大津波は“節句の厄日”に起きるというジンクスさえ生まれたということです。

高台へ移り住んだものの……。

明治の大津波のあと、三陸沿岸の町村では、いつか再来するに違いない津波から逃れるために、多くの世帯が高台に移転しました。

しかし、漁民にとって、海から離れて暮らすことは、不便で仕方ありません。

車も殆どない時代ですから、漁に出るたびに、高台の自宅と漁港とのあいだを、徒歩で往復しなければならないわけです。それに、長年住みなれてきた海辺の土地への愛着もありました。その上、唐丹村では、山火事によって高台へ移転していた村の大部分が焼失し、死者を出す災害に見舞われました。

こうして、いったんは高台へ移住していた人びとも、少しずつ元の海辺の土地へと戻ってきたのです。明治の大津波で被災した地域に、次々と住宅が再建され、災害以前と殆ど変わらない集落がつくられていきました。

そして、明治の大津波災害から37年後の1933年、再び三陸大津波による災害に見舞われたのです。明治三陸津波の教訓は、残念ながら活かされなかったといえましょう。

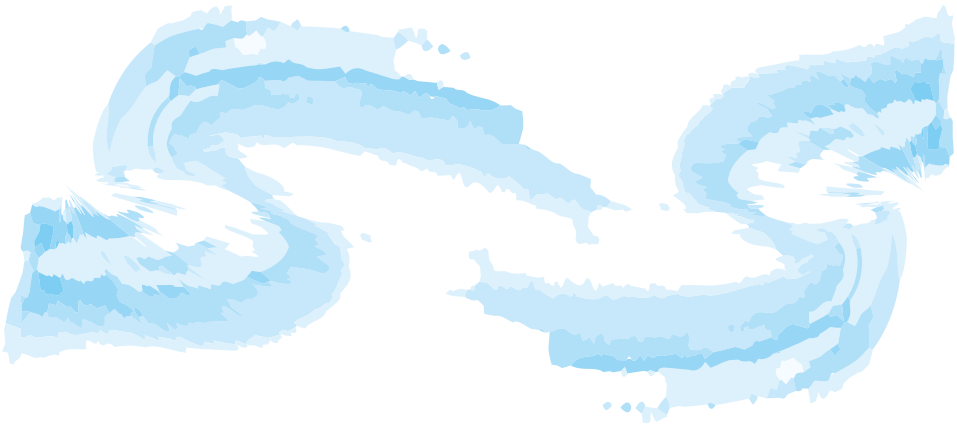
ところで、この昭和の大津波の時は、ラジオ放送が既に始まっていたため、ラジオによる情報伝達の手段が進んでいましたし、電信や電話など通信施設の発達が、ある程度の効果を発揮したといわれています。

それでも、3,000人を超える犠牲者を出してしまいました。その結果、三陸沿岸の各地では、集落を再び高台に移転させたり、防潮堤の建設や避難道路の整備など、防災対策が進められることになりました。

中でも、明治と昭和の大津波によって、大災害となった岩手県の田老村では、将来の津波に備えて、巨大な防潮堤を建設することが計画されました。しかし、計画された防潮堤の規模が、あまりも大きく、また戦時中であったことから、資金不足におちいったため、44年もの歳月をかけて、1979年（昭和54年）に高さ10メートル、総延長2,433メートルという二重の防潮堤が完成したのです。

この防潮堤は、田老のシンボルともいわれ、海外の防災関係者がたびたび訪れるほどで,実際に1952年（昭和27年）の十勝沖地震や、1968年（昭和43年）の1968年十勝沖地震の時に、津波から町を守る働きをしました。

ところが、2011年３月の東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）による巨大津波は、この防潮堤をやすやすと乗りこえ、その一部を破壊してしまいました。田老だけで、約180人が犠牲になったといわれています。

日本一の防潮堤があるから安心、と思っていて、避難が遅れた人もいたようです。いかに完璧と思われる施設が造られていても、自然はやすやすとそれを乗りこえてしまうということを、改めて思い知らされたともいえましょう。

三陸沖の大地震と大津波は、いつか必ず発生します。その時に備えて、過去に学びながら、地域ごとの防災対策を整備しておくことが大切なのです。